

# ぶつきょうと うた 仏教徒の歌

## ■ 楽曲データ

歌詞：小林一郎 作詞

楽曲：山田耕筰 作曲

発表：仏教音楽協会 1934年

初演：「第六回聖歌発表演奏会」 1934年11月25日 築地本願寺本堂

初出：『仏教聖歌 第六回発表』 佛教音楽協會 1934年

管理番号：M1246

## ■ 創作の経緯

仏教音楽協会からの委嘱により創作。『中外日報』（1934年7月13日付）には作品完成の報告として、歌詞と山田耕筰による自筆譜の写真が掲載されている。

## ■ 校訂報告

校訂譜：『聖歌・讃歌集』第4巻収録

底資料：『仏教聖歌 第六回発表』 佛教音楽協會 1934年

比較資料：作曲家自筆譜

校訂の詳細：特記事項なし

## ■ 解説

本願寺派では、帰敬式（おかみそり）のときに、三帰依文を唱えます。そのご文が示すように、仏と法（み教え）と僧（教団、信徒のつどい）の三つの宝に帰依することが、すべての仏教徒の「しるし」です。

この《仏教徒の歌》にも、「一つ心」、つまり三宝に帰依した仏教徒の喜びが表現されています。

## ◆ 作詞者について

作詞の小林一郎（1876～1944）は、立正大学や中央大学などで教授をつとめた仏教学者で、昭和初期には仏教音楽協会（仏教音楽作品の創作と普及を目的とする汎仏教的な団体）の設立に尽力しました。作詞を手掛けた仏教讃歌には、《御仏の身は》《仏陀伽耶》（いずれも藤井清水作曲）などがあります。

四連の詞に共通の言葉は、1行目「一つ心に」であり、4行目「此の悦び」です。全体を通じて、三宝（仏・法・僧）に帰依した喜び、仏の智慧と慈悲に包まれて生きる同心の喜びが表現されています。

## ◆作曲者について

作曲の山田耕筰（1886～1965）は、東京音楽学校（現・東京芸術大学音楽学部）を卒業後、ドイツ・ベルリン王立アカデミー高等音楽学校（現・ベルリン芸術大学）に留学しました。帰国後、1924（大正13）年には、日本に常設のオーケストラをつくろうと、日本交響楽協会を組織しました。

指揮活動と同時に、作曲家としては、交響曲・オペラ・歌曲・合唱曲など、多岐にわたる作品を遺しました。なかでも同時代の詩人（北原白秋など）との交流により、日本語のアクセントと語感を尊重する芸術歌曲を生み出した功績は高く評価されています。《仏教徒の歌》を作曲した頃は40代後半で、すでに《赤とんぼ》や《あわて床屋》など、歌曲や童謡を数多く発表していました。

また、戦前から宗門関係の相愛女子専門学校音楽科で教鞭をとり、戦後、1958（昭和33）年に相愛女子大学（現・相愛大学）に音楽学部が設置されると、初代音楽学部長として後進の育成に努めました。

## ◆歌い方について

- ①清新さに満ちた曲です。あまり遅くなく、快いテンポで歌いましょう。
- ②弱起（曲が小節の第1拍以外から始まる）の曲です。4拍目に「h」の子音があるときなど、単語の語頭ははっきりと歌いましょう。
- ③8分休符の直前の言葉が乱暴にならないよう、注意しましょう（2・6・10・14小節目）。
- ④歌い出しの「レ」→「シ」、3小節目「ソ」→「ド」の音程に注意しましょう。高い音にちゃんと届くように。
- ⑤2・3番の「称えあう」「頼みあう」の「あう」は、文語的な響きを重視する場合は「おお」と発音しましょう。
- ⑥6小節目4拍目に、この曲でいちばん高い音「ミ」が出てきます。音程や声の響きなどに気を付けて、練習してください。また、ここから始まる下降音型は、音が下がりすぎないように注意しましょう。
- ⑦12～14小節目「此の悦び」は低い音域から始まりますが、できるだけ力強く、明るい声で歌いましょう。

## ◆用途・音源など

各種の法座や集い、研修会で歌ってみてください。

音源は、CD『憶念』に収録されています。

解説執筆：大分哲照（御堂演奏会指揮者 福岡教区西嘉穂組明圓寺住職）

※本解説は、「メロディーの宝石箱」No. 31（仏教婦人会総連盟機関誌『めぐみ』第156号収録）を加筆・修正のうえ、転載。